人と環境 Vol. 11: 13－17 (2018)

【短　報】

看護学生が考える「適切ではない」と感じた看護師のみだしなみ

徳珍温子[1*]・浅井直子[2]・服部暁子[3]・奥村美加[4]・榎本孝子[5]・源野幸世[6]・芹澤紀代子[6]

[1]大阪信愛学院短期大学・[2]清恵会医療専門学院・[3]角谷リハビリテーション病院・
[4]清恵会病院・[5]和歌山県立こころの医療センター・[6]大和病院

Human and Environment Vol. 11 (2018)

The Well-groomedness of Nurses that the Students Felt Inappropriate

Atsuko Tokuchin[1], Naoko Asai[2], Akiko Hattori[3], Mika Okumura[4],
Takako Enomoto[5], Sachiyo Genno[6], Kiyoko Serizawa[6]

[1]Osaka Shin-Ai College, [2]Seikeikai Medical Corporation, [3]Sumiya Medical Corporation,
[4]Seikeikai Medical Corporation, [5]Medical center of Wakayama prefectural mind, [6]Daiwa Medical Society, Japan

看護学生の考える「適切ではないと感じた看護師のみだしなみ」について、看護学生 28 名に自由記述方式で調査を行った。得られたデータは階層的クラスター分析を行った結果、5 クラスターに分類された。クラスターの意味は《見た目の印象》、《清潔感》、《怖い》、《逸脱》、《不潔》であった。《清潔感》《不潔》は清潔の観点から、《見た目の印象》《怖い》、《逸脱》については、適切な対人関係を形成する上で障壁となり得る。看護学生の看護師のみだしなみについての評価は、看護を学んでいない人々よりも肯定的に評価されているのではないかと推測される。心理社会的エビデンス構築の必要性とみだしなみ教育が今後の課題である。

キーワード：看護師・適切でない・みだしなみ

1．はじめに

看護師は対人援助の担い手であり、受け手である患者あるいは利用者の情動に共感性を有することは、適切な対人関係を形成する上で必要不可欠である。看護基礎教育においても、また病院等医療施設の継続教育においても、コミュニケーションを中心に「接遇」研修などを行うことによって、看護師患者間の適切な対人関係形成について向上を図っている。

コミュニケーションは言葉や態度、あるいは知識や教養を身につけ、心理学や社会学などの学術領域からの知恵を応用することにより、向上していくものであると考える。その中で「みだしなみ」は休養であると考える。

*大阪信愛学院短期大学看護学科
〒538-0053　大阪市鶴見区鶴見 6-2-28
E-mail: atokuchin@osaka-shinai.ac.jp

受付：2018 年 9 月 21 日　受理：2018 年 12 月 20 日

©2018 大阪信愛学院短期大学

平成 19 年 4 月 16 日付けで「看護基礎教育の充実に関する検討会」の報告書が公表され[1]、看護基礎教育の中に看護の基本的技術の一つとしてコミュニケーションが位置づけされ、看護技術として心理学や社会学、その他の学問領域の知見を応用し、看護技術としてのコミュニケーションを磨いていくことが必要であると考える。

同時に、みだしなみについては、清潔の観点からナースキャップの是非や手洗い等は調査されているが、対人関係形成という枠組みでの調査は少ない。看護師からみた看護学生の茶髪許容度や一般市民からみた看護師の茶髪許容度については、評価される側の看護師の許容度は低下しているが、評価する側は年齢が高くなるにつれて茶髪に否定的であるという報告もあり[2,3]、看護師が許容されていると感じているみだしなみが、高齢者にとっては抵抗を覚えるということも考えられる。

清潔感と健康的であることを推奨されるみだしなみではあるが、見た目から受ける印象は非言語的コミュニケーションの重要な要素である。

しかし、まつ毛エクステンションやカラーコンタクトレンズ、また国内外のドラマなどから影響を受け、個々の看護師が多様なみだしなみの基準をそれぞれに持っていることは、対人援助の担い手であり、受け手である患者あるいは利用者の情動に共感性を有することへの障壁になることも懸念される。

そこで、清潔の観点にとどまらず心理社会的観点から看護師の適切なみだしなみを検討するために「看護師に適切でないみだしなみ」を明らかにすることを本調査のテーマとした。本調査では、看護師と実習を通じて接する機会を多く持った看護学実習を修了した 3 年次生を対象に「適切ではないと感じたみだしなみ」について、本調査に同意を得た者に対し自由記述による調査を行った。

２．研究方法

2.1. 研究対象

対象者には事前に文書と口頭にて調査を依頼した。対象は A 校および B 校の 3 年過程の 3 年次生 28 名であった。

2.2. 実施時期

実施時期は平成 29 年 11 月、3 年課程の領域別実習がほぼ終了した時期とした。

2.3. 調査方法・内容

調査は自由記述方式で行った。質問は「適切ではないと感じたみだしなみ」についてとし、記述用に A5 用紙を 1 枚配布した。

2.4. 分析方法

得られたデータは、記述された文章を excel ファイルに一言一句漏らすことなく記述し、その後、意味が同じと思われるものは語を統一した。フリーソフト KH-coder を用いて頻回に出現した語を頻出語としてリスト化し、3 回以上頻出している語でクラスター分析を行った。

2.5. 倫理的配慮

大阪信愛女学院短期大学倫理委員会の承認を得た後、対象者には事前に文書と口頭にて授業時間外の時間に調査を依頼した。対象学生調査の依頼の説明に同意したA校 3 回生およびB校 3 年生の計 28 名であった。

説明は自由意志を損なわないよう留意し、調査票は無記名で記入し、対象者のプライバシーに配慮した。説明内容は、①研究目的・意義･研究期間・方法、研究への参加・協力の自由意志であり、参加の可否が成績や学業に影響しないことについて、②プライバシーの保護、個人情報の保護の方法、研究終了後の対応について、③得られた成果は個人が特定されないことを説明した。

本研究は、大阪信愛女学院短期大学倫理審査委員会の承認と、清恵会医療専門学院長の承認を得た。また、利益相反に該当する企業、関係団体等はない。

３．結果

総抽出語数は 1,061 語で使用語数は 182 語、出現回数を 3 回以上の語について階層的クラスター分析を行い、その結果 5 クラスターに分類された。（表１）

クラスター1 は〈カラーコンタクト〉〈思う〉〈まつ毛エクステ〉〈看護〉〈感じる〉〈化粧〉〈患者〉〈多い〉で、クラスター2 は〈髪の毛〉〈肩〉〈香水〉〈ナース〉〈清潔〉、クラスター3 は〈見える〉〈怖い〉〈白衣〉〈濃い〉〈色〉、クラスター4 は〈金髪〉〈大きい〉、クラスター5 は〈ピアス〉〈マスク〉〈肘〉〈長い〉〈爪〉〈人〉〈明るい〉〈髪〉であった。（図１・２）

共同研究者間で、クラスターから読み取った意味を検討し、命名した。

クラスター1 は〈カラーコンタクト〉〈思う〉〈まつ毛エクステ〉〈看護〉〈感じる〉〈化粧〉〈患者〉〈多い〉で《見た目の印象》、クラスター2 は〈髪の毛〉〈肩〉〈香水〉〈ナース〉〈清潔〉で《清潔感》、クラスター3 は〈見える〉〈怖い〉〈白衣〉〈濃い〉〈色〉で《怖い》、クラスター4 は、〈金髪〉〈大きい〉で《逸脱》、クラスター5 は〈ピアス〉〈マスク〉〈肘〉〈長い〉〈爪〉〈人〉〈明るい〉〈髪〉で《不潔》とした。（表２）

表１　出現回数を 3 回以上

名詞		サ変名詞		形
髪の毛	9	コンタクト	7	清潔
まつ毛	8	看護	6	不潔
カラー	7	化粧	4	形容詞
ピアス	7	名詞 C		明るい

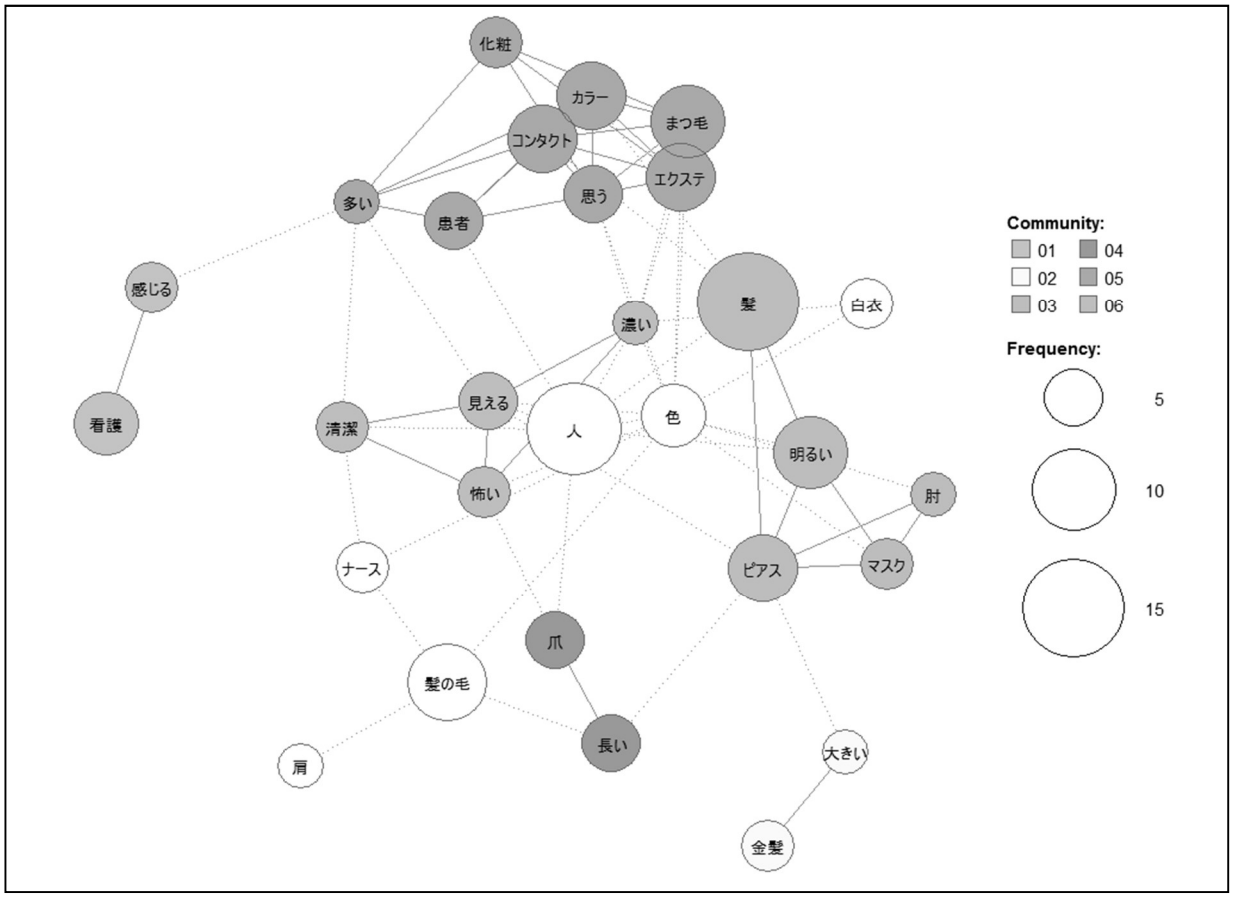

図２　共起ネットワーク

４．考察

4.1. 看護学生と看護師との関係

看護学生にとって看護師は敬意の対象であり、本研究において清潔の観点から《清潔感》《不潔》については既習の学習に照らし合わせて、「適切ではないと感じた看護師のみだしなみ」ではないと考えていることが分かった。明らかに不適切だと言える〈金髪〉については《逸脱》と感じているが、《見た目の印象》《怖い》について対人関係の障壁になると感じていることが分かった。

このことは長谷部らの述べている「看護師のみだしなみに関する患者の見解において、専門職としてのみだしなみと個人のおしゃれは同義ではない。香水や薬品の臭い、口臭など臭いに関する項目やアクセサリーに関する見解は厳しく、職業人として清潔感のあるみだしなみを求めている」[3] と同じである。

また、荻は「化粧が「濃い・派手」と感じる看護師の印象は、看護師、患者、家族ともに「話し掛けにくい」「近づきにくい」「怖い」が、また「化粧が「薄い・地味」と感じる看護師の印象は、「話しかけやすい」「清潔」「安心・信頼できる」「優しそう」の割合が高いて、許容度はそれぞれの経験や価値観によって異なっていた。しかしながら、清潔に関すること、即ち感染予防に関する看護を行う上で重要とされる身体的事項についての討議においては、ズレや不一致が殆どなかった。本研究においてもこの点がまず示された。

その理由として、清潔については、ナースキャップの是非や手洗い等の有効性が調査されていることや「発表されている」「発表されていない」の如何を問わず、病院内での調査で最近の有無を培養検査で調べるなどの体験があり、エビデンスが認識されているからからであると考える。

一方、メイクや髪の毛の色については心理社会的要素が強く、価値観も経年変化しており、前述したとおり、共同研究者間でも意見の不一致があった。

本論文の「はじめに」で述べたように、看護師からみた看護学生の茶髪許容度や一般市民からみた看護師の茶髪許容度については、評価される側の看護師の許容度は低下しているが、評価する側は年齢の高くなるにつれて茶髪に否定的であるという報告もあり[1] [2]、心理社会的側面からのエビデンスを提示することで「望ましいみだしなみ」「適切でなないと感じたみだしなみ」を明確に自覚することができると考える。

しかしながら、看護学生の多くは学校から病院へと社会人としての第一歩を踏み出すことになる。社会の多様性に触れる期会が少ないままに、看護の専門職としての社会人生活をスタートさせる。また、他の同年代の学生に比較して学修に費やす時間が多く、学生時代の部活動やアルバイト等で得られる経験も少ない。そのことから、看護以外のみだしなみの価値観に触れる期会が少ないのではないかと推測される。菊池は入職早期の新卒看護師への看護師長のかかわりとして「新卒看護師の心身の状態に気にかけて、社会人としての常識をさとし、新しい生活習慣や人間関係などの適応に気を配っていた。みだしなみは、社会人としてのマナーであると同時に、命に関わる仕事をしている看護師が患者に与える印象として大切であると捉えており《身だしなみの大切さをさとす》ようにしていた」と述べており[6]、みだしなみについての教育的介入を意識していることが分かる。しかし、なぜ必要であるのかの明確なエビデンスを見出すことは難しく、経験という知を理論という共有可能な言語にして系統的に記述し、説明するに至っていない。

先ず、みだしなみについて、心理社会的なエビデンスを示すことが第一の課題と考える。そして見出されたエビデンスを示すことで、自己を教育する意識や自己を管理する意識が発達するのではないかと考える。

藤田らは「小学生の通学路に不安感を持っている保護者がより子どもと安全について会話しており、リスク管理は将来の安全を高める行為であるがそれを駆動させるのは不安や心配である」[7]と述べている。知っていることによってリスク認知能力やリスクセンスが高まることを述べているのだが、同様に、知ることによって「不適切なみだしなみ」について、気づく能力が高まるとするならば、基礎教育の段階で看護学生に社会を知る機会をつくるような教育的活動を検討する必要があるのではないかと考える。また、継続教育においてもエビデンスを明確に示し、グループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワークなどによる課題解決型の能動的学修（アクティブ・ラーニング）を取り入れて[8]、知識と経験を合致させて実践できる教育への模索が、今後の課題であると考える。

４．おわりに

本研究は、心理社会的観点から看護師の適切なみだしなみを検討するために「看護師に適切でないみだしなみ」を明らかにすることを目的に実施したが、看護学生からの「看護師に適切でないみだしなみ」については、研究者が予測していたよりも、否定的な意見が少なく感じた。

日々、臨床でまたは看護基礎教育の場で身だしなみについて、感じ考えた意見をもとに本研究に取り組み始めたが、看護学生に教授すべき内容や方法が精選されていたのかということも考えなければならない。

看護者にとって望ましいみだしなみとは何かを考えてきたが、看護学生の立場というバイアスを基礎教育の中で形成しているのであれば、社会における看護に対する期待やイメージを前提に「みだしなみ」の研究をさらに進める必要がある。

本稿は第 49 回日本看護学会－看護教育－で発表したものを加筆・修正した。

文　献

[1] 山田眞佐美・宮本ありさ他：看護学生の茶髪はどこまで許せるか？－看護職員へのイメージ調査より－. 第32回日本看護学会論文集,看護教育, P106（2002）

[2] 駒井初美・佐藤冨美子：看護師の茶髪の印象と許容度－患者と職員の立場からの比較－. 第 34 回日本看護学会論文集，看護総合，P71（2004）

[3] 長谷部佳子・波久知子：看護師のみだしなみに対する患者の見解．日本赤十字北海道看護大学紀要 7，1－9（2007）

[4] 荻あや子：患者や家族と看護師の化粧に対する認識の比較に関する研究．コスメトロジー研究報告 25，130－137（2017）

[5] 荻あや子・玉谷奈都美・岡山加奈：大学生が患者視点でとらえた看護師の化粧に対する評価．岡山県立大学保健福祉学部紀要　21（1），131－141（2014）

[6] 菊池真紀子：入職早期の新卒看護師への看護師長の関わり．日本看護管理学会誌 16 (2)，130－138（2012）

[7] 藤田大輔・豊沢順子：小学生の保護者の通学路に関する安全意識について．学校危機とメンタルケア　4，1－12（2012）

[8] 大学教育部会の審議のまとめについて（素案）http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/015/attach/1318247.htm（Access2018.9.7）

論文集「人と環境」Vol. 11 (2018)
大阪信愛生命環境総合研究所編